

【振袖】

その日の朝。私はいつもより三時間も早く起きて、家を出た。澄んだ青空と眩しい太陽が容赦のない爽やかさを演出し、夜行性の私にドラキュラ気分を味合わせる。思わず帽子を目深にかぶってしまったが、友の新たな門出に相応しい、最高の“結婚日和”だ。

式場近くの美容室へ向かい、カウンターで名前を告げた。持参した着物を渡し、案内された椅子に腰かける。着付け用ブースでは、着付け師がそそくさと準備を始めた。

「今日はお振袖ですね。どんなメイクに致しましょう？」

しまった、何も考えていなかった。私は、暫し悩んだ後、口角を上げて言った。

「古風で、上品な感じでお願いします」

「了解致しました」

美容師はてきぱきと道具を揃え、仕事にかかる。この日の為に黒に戻した髪を後ろで束ね、薄くファンデーションを塗っていく。年々濃くなるクマも、綺麗に消してくれた。

「お着物のお色味から考えて……アイ・シャドウはこちらで如何でしょうか？」言いながら、今日の青空のように美しいそれを、手の甲に延ばす。成る程、着物とよく合いそうだ。手馴れた仕事ぶりに心地良さを覚えた私は、安心して目を閉じた。寝不足も手伝い、思考が揺れ始める。

「唯ぼんやりした不安」と言ったのは、芥川だったろうか。己の小さな感情に、文壇の巨匠の言葉を当て嵌めるのは大変憚られるが、私が今感じているのは、正にそれだった。さして珍しい感情ではないだろう。しかし、友の幸せを心の底から喜ぶと同時に脳の片隅で渦巻くのは、“まだ若いのだからどうにでもなる”という、根拠の無いフレーズへの不安だった。焦ってはいない。まだ結婚する気もない。しかし、年々選択肢は減るし、親も老いる。不況は今後も続くだろう。まだ若いのは本当だし、恋も仕事もうまくいくかもしれない。しかし、唯ぼんやりと、不安なのだ。

髪を結う美容師と、鏡の中で目が合った。

「綺麗なお着物ですよ。こんなに素敵な絞りのお着物、滅多にお目にかかりませんよ」

有難うございます、とにっこり微笑む。

「母からの、お下がりなんです」

「あら！益々素敵。大事にして下さいね」

散々着たから、もう裾が汚れてるのよね、と母は言ったが、そのさくら色の

総絞りは、花のような儂さと、うっとりするような優美さを、今も尚湛えている。いずれは、まだ見ぬ娘に継ぐつもりでいる。華やかな笑顔で凜と着こなすその姿を、是非見たいと思う。

私はまた、ぼんやりと思う。母は何を思って、この着物に袖を通していただろうか。

首から上の支度が終わった。希望通りの仕上がりだと、もうすぐ始まる式の予感に、口元が綻ぶ。私は振袖に袖を通した。気分が高揚する。今日も晴れやかに、友の門出を祝おう。そして、美しい幸せの思い出を染込ませるのだ。私と、さくら色の振袖に。